

ベトナム醫學形成の軌跡

眞柳 誠

緒言

かつてはベトナム固有の醫藥學を南醫・南藥、中國醫藥學やベトナム化したものを北醫・北藥と呼んでいた。兩者を合わせて東醫漢喃、1945 年の獨立からは東醫學と稱し、現在は慧靜古傳醫科大學（Tue Tinh Traditional Medicine College）と 6 醫科大學の東醫學部で専門の醫師が 6 年制で育成され、臨牀にあたっている。1961 年には東醫研究院と東醫學會も設立された。ベトナムの醫學文獻と史料は高温多濕の風土と戦亂ゆえ散佚が著しいが、後黎朝時代までの軌跡を先行研究[1][2][3]と眞柳の調査知見より概説したい。

1 ベトナム史と醫史料

ベトナム北部は前 2 世紀の漢朝統治以來、6 世紀の一時期を除き中國の統治が 10 世紀まで續いた。それゆえ漢字が廣く使用され、科擧制度も獨立後の 11 世紀から 20 世紀初頭まで採用されていた。しかし 15 世紀初頭の明朝統治と獨立戦争で大部分の古籍が失われ、現存は 15 世紀以降の寫本や刊本に限られる。また李朝（1009～1225）から後黎朝（1428～1789）まで首都の昇龍（現ハノイ Hanoi）にあった國子監などの藏書は、阮朝（1802～1945）が首都とした順化（現フエ Hue）に移設された。それらの現況はまだ十分に調査されていない[4]。

ところでベトナムの醫書は、後述する 14 世紀以降に成立した書のみ現存が知られている。しかし 11 世紀の獨立王朝時代からは、太醫院の御醫が高價な北藥（中國藥）を用い、王や官僚の健康管理にあたっていた。民間では藥師（村醫）が現れ、ベトナム産で安價だが効果の高い南藥で庶民を治療していた。彼らは恐らく經驗を記録していただろう。しかし、そうした寫本は生計のため「祕傳」とされて廣く流布せず、しだいに散逸したのは當然だった。

他方、ベトナムの書籍印刷は陳朝（1225～1413）末の 14 世紀から記録されるが、20 世紀中葉まで大多數は政府編纂物の國家出版で、個人出版や商業出版は多くなかった。醫

書出版は寺院等で非商業的に行われることもあったが、現存は少ない。醫書の商業出版も少なく、現存書は多くが 19 世紀以降の印刷である。それゆえ醫學史料の大多數が、かつて祕傳とされた筆寫文獻として傳存する。さらに全ベトナム所在古醫籍情報の網羅が未完成なため、現存書はハノイの漢喃 Han Nom 研究所等に所藏される約 400 書目・600 件ほどしか知られていない。こうした事情が重なり、史實としてのベトナム醫學史は陳朝より以前に遡ることが困難な状態が続いている。

2 陳朝時代（1225～1413）の醫書と慧靖

現存するベトナム最古の醫書は、陳朝時代の朱文安 Chu Van An (1292～1370) [5]が編纂した『醫學要解集註遺篇』と考えられる。本書は『内經』に基づき各疾病の病因と病理を分析し、診断と治療を述べる。朱文安は外感病の熱證と寒證を治療するため、新たに黨扣湯と故原湯の 2 方も創成した。

陳代を代表する醫家は惠靖 Hue Tinh (1330～1385～?) で、本名は阮伯靖 Nguyen Ba Tinh、のち慧靖（多く慧靜に誤寫）Tue Tinh と通稱される。45 歳の 1374 年に科擧に合格したが仕官せず、春場府膠水縣の護舍寺で修行し、醫業を営んだらしい。1385 年に明に派遣されたが、施藥のために留められ、當地で没したという。つまり慧靖の醫書は 1385 年以前の著述となる[6]。

1717 年に黎朝の侍内府が慧靖の著として編刊した『洪義覺斯醫書』2 卷は、上卷に『南藥國語賦』『直解指南藥性賦』、下卷に『十三方加減』『傷寒格法治例（傷寒三十七槌）』『症治方法』を収める。ただし『十三方加減』は元・徐和用『加減十三方』（1413 初版）、『傷寒格法治例』は明・陶華『傷寒六書』（1522 初版）中の『〔傷寒家祕〕殺車槌法』に基づくのが明らかで、慧靖に假託した 16～18 世紀の付加に間違いない。

『南藥國語賦』はベトナムで常用する南藥の漢名・ベトナム名・効果を、24 韻の賦としてベトナム文で記す。やはり後世の改變や付加があるが、古體の喃字と漢字もあるので、原本は慧靖の著と判斷できる。『直解指南藥性賦』は治法ごとの 280 藥味を漢文の歌賦で列記するが、冒頭に「欲惠生民、先尋聖藥、天書越定南邦、土產有殊北國」と述べ、北國（中國）と異なる南邦（ベトナム）の南藥を強調する。また末尾に「集諸方良藥、大垂佛手濟民、……斯不負南天廣惠」とあり、冒頭とともに「惠」を使用するので、惠靖つまり慧靖の著と考えられる。『南藥國語賦』『直解指南藥性賦』の兩書で用いられた歌賦形式と

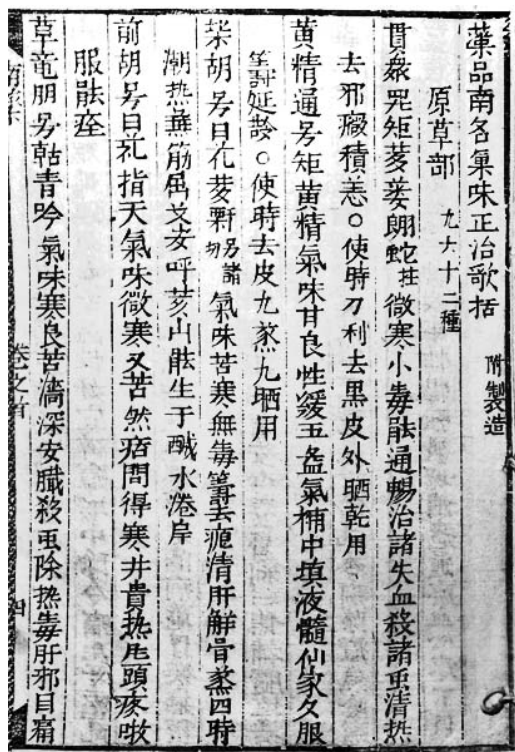


圖1 『南藥神效』首卷

内容が後のベトナム醫藥書に遺した影響はきわめて大きい。

一方、慧靖は『南藥神效』も著した。首巻の本
草と巻1 諸中科（中風）～巻10 外科まである全
11巻の醫學全書である。首巻の「藥品南名氣味正
治歌括」（圖1）では原草部62種・藤草17種～
人6種につき、漢名・ベトナム名（字喃）・氣味・
藥性・加工を各々數行で記す。その分類は概ね『本
草綱目』（1596初版）に合致するので、後世の改
編や増補を多く受けたのは疑いない。ただし巻1
～10の全體は一部に漢文の混じる漢喃文で、南藥
の簡便な治方が多く、中國の影響は少ない。また
璠輝注の『歷朝憲章類誌』に慧靖の著として本書

名を擧げるので、現傳本は慧靖の原本に由來するだろう。

ともあれ慧靖が提唱した「南藥はベトナム人を治療する」という考え方、および藥效等
の歌賦形式は、以後のベトナム醫學に強い方向性を與え續けたのである。

3 後黎朝時代（1428～1789）の醫書

3-1 潘孚先の『本草食物纂要』

この時代の初期には『本草食物纂要』の原本が著された。現傳の本書1冊はフランス極
東學院の筆寫本（漢喃研究所 A.1219）で、入手が容易な南藥と日常食物の392味を草部・
菜部～金部のように分類、漢名にベトナム名を字喃で付記し、氣味・效能・解毒法などを
記す。また1429年に編撰したという陳光泰丙子科太學生・潘孚先の識語が書末にある。
潘孚先 Phan Phu Tien は陳朝・黎朝の進士で歴史・文學に業績を築き[7]、その活躍年代
と官位は本書の識語と矛盾しない。

一方、本書には無名氏・無記年の序文があり、諸本草書や『本草綱目』から摘録したと
記す。また本文では李時珍の文章を多く引用するので、『本草綱目』を利用しているのは間
違いない。すると16世紀の『本草綱目』と潘孚先の年代が矛盾するので、本書は序文と
本文に後世の付加と改編があり、原本と相當かけ離れた内容になっていると判斷できる。

ただし 15 世紀の『洪德國音詩集』に見られる古い字喃が若干使用されているため、基盤となった潘孚先の本草食物書があったことは推定していい。

3-2 阮直の『保嬰良方』

進士の阮直 Nguyen Truc (1417～1473) [8]も、ベトナム現存最古の小児科書『保嬰良方』4 巻を編纂した。現存するのは極東學院の寫本春卷 1 冊 (漢喃研究所 A.1462) で、夏・秋・冬巻の所在は未詳。無記年の阮直自序に、専門外ではあるが (中國) 醫書を研究し、精髓を収集・摘録したと記す。内封に「延寧乙亥年 (1455) / 保嬰良方 / 秋七月吉日奉録」と記すので 1455 年の成立と分かり、また規格化された書式からも筆寫底本が刊本だった可能性を推測させる。全文は漢文で、字喃はない。

現存部分は小児の胎毒・驚風・痘疹などにつき、診断と治法を歌・賦・解・辯・論などで記す。その中には中國の賦や歌の原形を留める部分と、獨自に修正・編集した部分が読み取れる。このように進士が醫藥書を編纂するのも、ベトナム醫學の一特徴といえよう。

3-3 黃敦和の『活人撮要』と鄭敦樸の『活人撮要増補』

黃敦和 Hoang Don Hoa の記述は黃氏 17 代の家譜になく、彼の生没年もわからない。しかし莫氏との戦い (1592) で黎朝軍の發熱や吐瀉、また戦闘用象を治療したと『神譜』に記録されるので、16 世紀の醫家と分かる。彼の著とされる『活人撮要』には、たしかに發熱や吐瀉の治法が載る。また水牛・牛・馬の治法もあるが、北部ベトナムに象は殆どいないため、その治法は記載されない。一方、本書には入手の容易な藥物による治法が多く載り、醫療の要點を纏めた書といえる。しかしながら家畜の治療は黃敦和以前の書に言及がないため、彼をベトナムの獸醫と軍醫の始祖と呼んでもいいだろう。

『活人撮要』を増補した鄭敦樸 Trinh Don Phac (1692～1762) は 1741 年に醫科試験に及第し、首番太醫院佐中宮の職にあった。彼は黃敦和と同じ多仕村の出身ゆえ、『活人撮要増補』3 巻を編纂したのだろう。

現存の本書 3 巻は極東學院の寫本 (漢喃研究所 A.2535) で、整然とした書式は刊本からの筆寫を推測させる。巻 1 は婦人門、巻 2 は小兒門、巻 3 は外科門と六畜調治門で、基本的には漢文で記される。ちなみにベトナム醫書には婦人・小兒の 2 門、ないし外科を加えた 3 門から成る書が少なくない。鄭敦樸が『活人撮要』の増補に用いた書は『南藥神效』のほかに、中國醫書の『景岳全書』(1710 初版)、『壽世保元』(1615 成立)、『醫學入門』

(1575 成立)、『濟陰綱目』(1620 初版)、『本草綱目』(1596 初版) などがあり、これらが太醫院に備わっていたことを知れる。さらにこれら中國書は後のベトナム醫書でも多く引用され、強い影響を与えた書である。内容は病症毎に治方・主治・藥味・加減・服用法の記載が多く、論は少ない。また口訣の列記が多く、鄭敦樸の臨牀經驗を窺わせる。

3-4 吳靖の『萬方集驗』

黎朝の進士・吳靖 Ngo Tinh も『萬方集驗』8 卷を編纂した。現存する極東學院寫本(漢喃研究所 A.1287/1-8) には景興 23 年(1762) の重訂序がある。これには「黎朝甲辰科進士參政儒林男吳(號鎮安／字文靖) 撰輯／黎朝進士富川縣知止社阮儒較正／醫院雲溪秀才阮迪抄寫」の署名があり、治方の一覧が難しいので國內の家傳も含めて博搜して編纂したと記される。

すべて漢文の病門別醫方書。卷 1～4 は内科の通治部で、瘧・痢・泄瀉・諸風・霍亂・傷寒・傷風・中寒の各門から始まり、傷寒より瘧・痢・泄瀉を前置する點はベトナム醫書に共通する特徴といえる。以下は卷 5 外科、卷 6 女科・兒科、卷 7 上焦病、卷 8 中焦病・下焦病の各門が載り、上中下焦病の編成にも獨自性が見える。

また各病門では各症候の治方を列記するが病論はなく、文末ないし文頭に出典を記す。醫方の多くは『本草綱目』(あるいは『外臺祕要方』『證類本草』) からの間接引用だが、『本草綱目』以降の中國醫書からも引用される。また現在未見のベトナム醫書も引用される點は注目していい。こうした醫方のみを編纂する形式は、明『普濟方』(1390 成) の影響も考えられる。なお本書は現存するベトナム唯一の敕撰醫方書であり、その意味でも價值が高い。

3-5 黎有倬の『〔海上懶翁〕醫宗心領』

黎有倬 Le Huu Trac (1724～1791) の有倬は字で、名は有診、別名は有薰、俗名は招七で、海上懶翁と號した。祖父の黎有名は景治 8 年(1670) の進士で、官は憲察使に至った。父の黎有謀も進士で、その第 7 子が黎有倬である。海陽省唐豪縣遼舍社の出身で、母の郷里(現在の河靜省香山縣情艷社) で生まれ、父の郷里で成長し、のち母の郷里に戻り、海上懶翁と號して醫業を行った。ゆえに一般には海上懶翁や懶翁と稱される。

幼時は父に従って都の昇龍で就學し、拔群の才能と博識により名士となる。20 歳にして父の葬儀と母への孝行のため郷里に戻り、學業には戻らなかった。當時全國は多くの抗爭

で混亂状態だった。さらに旱魃・飢饉が重なっていたため黎有倬は自立の道を思いあぐね、天の學に詳しい 80 歳の武先生に陰陽學を學んだ。のち從軍したが、戦争は庶民に何の益もないことを悟り、第 5 兄の死を機に母の里香山に歸郷する。

しかし悩み多く衰弱したため、科擧を捨て醫に隱棲していた陳讀の治療を受け、1 年ほどで治癒した。そこで學んだ醫藥書中に『馮氏錦囊祕錄』（清・馮兆張著、1702 初版。全 8 書・計 50 卷の醫學全書）があり、彼が醫學の陰陽論に深い理解を示したので、陳讀は醫術の全てを彼に傳えた。1756 年には醫學の師を求めて上京したが果たせず、ふたたび香山に歸り讀書を續けた。さらに醫業を 10 年以上續けた後、自己の経験と研究に基づく著述を 1770 年の數年前から開始し、最終的に『〔海上懶翁〕醫宗心領』全 28 集 66 卷を編纂した。上記の傳は本書の自序・凡例・尾卷ほかによる。

本書は唐郡武が自筆稿等に基づき校正し、1879～85 年にかけて北寧の同人寺で初めて刊行された。各卷の自序年から、1770～86 年にかけて著述されたことが分かる。本書の



圖 2 『〔海上懶翁〕醫宗心領』自序

總目錄には各卷名が記され、内容も注記すると以下のようなものである。

引首・首卷「醫業神章」：生涯の行醫經驗など。卷 1「內經要旨集」：『內經』最重要點の解説。卷 2「醫家冠冕集」：醫學の綱領。卷 3～5「醫學求源集」：先哲醫家格言と解説。卷 6「玄牝發微集」：先天の腎氣水火と六味・八味丸論。卷 7「坤化採眞集」：後天の脾胃氣血と補脾劑の論。卷 8「導流餘韻集」：懶翁の醫論。卷 9「運氣祕典集」：運氣論。卷 10・11

「藥品彙要集」：本草 150 味の藥性。卷 12・13「嶺南本草集」：『南藥神效』ほかによる南藥の藥性。卷 14「外感通治集」：外感病と治法論。卷 15～24「百病機要集」（うち卷 17・18 のみ刊）：病門別の論と治法。卷 25「醫中關鍵集」：各病治療の奧義。卷 26・27「婦道燦然集」：婦人病と産前産後の論治。卷 28「坐草良模集」：産科。卷 29～32「幼幼須知集」：小兒科。卷 34～43「夢中覺痘集」：痘瘡。卷 44「麻疹準繩集」：麻疹。卷 45「心得神方集」：『錦囊』祕方の注解。卷 46「倣倣新方集」：自己創方。卷 47～49「百家珍藏集」：病門別

ベトナム名醫著效方。卷 50～57「行簡珍需集」：病門別本草單方。卷 58～60「醫方海會集」（卷 58 のみ刊）：病門別醫方集。卷 61「醫陽案集」：治驗醫案。卷 62「醫陰案集」：不治醫案。卷 63「傳心祕旨集（珠玉格言）」：醫療全般の精髓格言。卷 64「問策集」：未刊。尾卷「上京記事集」：昇龍上京時の記事・唱和詩文など。

以上のように本書は目録上で首巻・尾巻および巻 1～64 の計 66 巻となるが、現存本には缺巻が多く、刊行序からして実際に刊行されたのは計 27 集・55 巻だったらしい。むろん一個人が編纂した醫書として、その浩瀚さはベトナム最大、中國・日本・韓國でも例が少ない。これと懶翁の没後約 100 年後に出版されたこともあり、はたして彼一人の著述かは疑問視される。しかし各巻の自序を含め、全内容は高レベルで首尾一貫しており、別人の著述が混入した形跡は現段階で巻 12・13 にしか見あたらない。

本書の功績には以下の 3 点があると評される。第一に、中國醫學をベトナム化した醫學體系が提示され、その特徴を鮮明にしたこと。第二に、慧靖の「南藥はベトナム人を治療する」觀點から、ベトナム固有藥の效用と處方を網羅、新たな治療方も創成したこと。第三に、難治病の治驗醫案「陽案」とともに、不治だった醫案「陰案」も載せ、後進への教材としたこと。本書において理論・治療方法、特に効果的な南藥の使用による治法と處方が提示され、體系性を備えたベトナム醫學が完成された。本書は未刊段階から多くのベトナム醫書に引用され、また一部や抜粋が寫本で流布するなど、その影響はきわめて大きい。正しく懶翁はベトナムの醫學と歴史を代表する醫家と評されねばならない。

3-6 阮嘉璠の醫書

進士の阮嘉璠 Nguyen Gia Phan（1749-1829）[9]も、『胎産調經方法』『理陰方法通録』『護兒方法通録』『療疫方法全集』『醫家方法總録』の 5 醫書を著した。

黎朝末期に實権を握った鄭氏は世継ぎが少なく、進士の阮嘉璠が 3 代続く醫家の出であることを知り、彼に産前書を編纂（1777）させ宮中で用いた。阮嘉璠は 1786 年に歸省し、鄭氏に提出した書に缺けていた産後を補い、漢文の産科書『胎産調經方法』[10]を著した。本書（漢喃研究所 VHv.2069）には妊娠 1 月～10 月の胎兒と經脈の關聯、預辨男女法・臨産用藥、1 月～10 月の胎兒圖説、調經・求嗣・結胎交合妙訣・未及三月轉女成男妙訣の諸篇に論と醫方があり、治驗も記される。引用される中國醫書は『濟陰綱目』『婦人良方』『證治準繩』『景岳全書』『馮氏錦囊祕録』『壽世保元』『萬病回春』などで、當時よく讀まれた書を窺わせる。

さらに阮嘉璠は婦人科書の『理陰方法通録』4巻（存2巻、漢喃研究所 A.2853）も、嘉隆13年（1814）に漢文で編纂した。本書には1788年の序文もあるので、『胎産調經方法』の増補と考えられ、やはり中國醫書の引用が多い。また本書編纂の際、『胎産調經方法』から小兒科を分けて『護兒方法通録』としたという。

彼は瘟疫治療の『療疫方法全集』2巻も1814年に著した。本書寫本（漢喃研究所 A.1306）の應川伯跋（1816）では、1789年と1814年の大疫における阮嘉璠の治驗に基づくという。引用書の著者には張景岳・馮兆張・趙獻可・吳勉學などがあり、やはり當時よく利用された中國書だったことが分かる。なお『理陰方法通録』の自序に『醫家方法總録』の自著があると記されるが、まだ発見されていない。

4 陳朝・後黎朝時代（1225～1789）の醫學展開

これまで現存する陳朝・後黎朝時代の醫書を検討してきたが、これら通じて500年を越す當時代におけるベトナム醫學の展開と特徴を、いささか垣間見ることができる。

第一に気づくのは、ベトナムの風土と疾病構造・體質に對應した醫學の發展である。現存最古のベトナム醫書である14世紀の『醫學要解集註遺篇』では、外感病の熱證と寒證のため黨扣湯と故原湯が創方されていた。急性疾患対策でも瘧・痢・泄瀉を傷寒・中風より重視するのは、ベトナム醫書に共通する特徴である。『醫宗心領』卷14外感通治集では傷寒とベトナムの風土・體質を論じ、ベトナムの傷寒に麻黃・桂枝は使用不可と斷定する。同書には高温多濕の流汗で失われた陰液も同時に補う、補陰兼用の新創方が多數載る。

これに關聯するのが慧靖の提唱した醫方への南藥の應用で、その影響は各醫書に廣く認められた。すなわち第二の特徴はベトナム醫藥學分野の擴大である。南藥の開發と應用は



圖3 慧靖像

ベトナム固有食物の藥效認知まで及び、独自の南藥本草・食物本草が生まれていた。臨牀では風土病ともいえる瘧・溫疫・瘴氣の治療が發展したのみならず、人と同様に家畜の治療も重視する醫書が著されている。さらに戦亂の多さゆえ軍醫學が生まれ、宮廷の世繼ぎ対策では種子と保育のため、男女の強精・房中と婦人科・小兒科・痘疹の分野が進展していた。こうした經驗處方も集大成した醫方書まで敕撰されていたのである。

第三には慧靖の『南藥國語賦』『直解指南藥性賦』に始まる、歌

賦形式による論述の普及が挙げられる。歌賦形式の醫書は中國元代から廣まり、明代に普及、その影響は朝鮮・日本にも及んだ。しかし大多數の醫藥書に當形式が採用されるのはベトナムの一大特徴で、暗唱と口承で醫學を傳えた反映だろう。ベトナムでは醫學を公開する作用のある商業出版の醫書が、19世紀末まで出現しなかったと推定される。歌賦形式が廣く採用された背景には、この社會經濟と口承文化の特徴があるのではなかろうか。

第四には、筆寫され續けて現在に傳わる當時の醫書が、多くは進士ないし進士一族・關聯の人物による編纂という特徴を認められる。むろん科舉制度がその背景にあるが、同じく科舉が行われた中國・朝鮮で、進士の著述した醫書はベトナムほど普及や傳承がなされていない。これはベトナム固有の儒と醫の關聯を推測させる。それゆえ彼らが著述に引用した中國醫書は、『本草綱目』52卷（1596）、『馮氏錦囊祕錄』59卷（1702）、『景岳全書』64卷（1710）、『證治準繩』44卷（1760）といずれも大部かつ高價で、一般醫家が普通に利用できる書ではない。さほど大部でもない『醫學入門』8卷（1575）、『萬病回春』8卷（1587）、『壽世保元』10卷（1615）にしても、成立や中國初版から大きな時間差なく利



圖4 海上懶翁（黎有倬）を祀る醫廟（Hanoi）

用している。これも一般醫家には難しいことであろう。こうした要因もあり、彼らの醫書が傳承や引用され續けたと思われる。

そして第五に、黎有倬の『〔海上懶翁〕醫宗心領』28集全66卷の出現を挙げねばならない。本書には以上に記したベトナム醫藥學の全特徴が網羅されている。のみならず、それら特徴が系統的・論理的に整理されており、ベトナム醫

學の獨自性を備えた體系が本書で具現化されたといっても過言ではない。これゆえベトナム史でも、最大の醫人は黎朝時代の海上懶翁（黎有倬）とされるのである。しかし本書はその浩瀚さと漢文のため、いまベトナム東醫界でおよそ利用されていない。實に残念といわねばならない。

文獻および注

- [1] Hoang Bao Chau, Pho Duc Thuc and Huu Ngoc, Overview of Vietnamese traditional Medicine, VIETNAMESE TRADITIONAL MEDICINE (Second Edition), p.1-28, The Gioi Publishers, Hanoi, 1999.
- [2] LÂM Giang, *Phần thứ nhất: Thư tịch y dược cổ truyền Việt Nam thực trạng* (ベトナム傳統醫藥書籍の實情), LÂM Giang 主編, TÌM HIỂU THƯ TỊCH Y DƯỢC CỔ TRUYỀN VIỆT NAM (ベトナム傳統醫藥書籍考), p.13-190, Nhà xuất bản Khoa học xã hội, Hanoi, 2009.本論文は大西和彦氏に依頼した日本語抄訳より引用した。
- [3] MAYANAGI Makoto, Nghiên cứu so sánh định lượng thư tịch y học cổ truyền các nước khu vực đồng văn [Quantitative Comparative Studies on Traditional Medical Treatises in Countries Using the Same Language (i.e., Classical Chinese)], Mục lục Tạp chí Hán Nôm [漢喃雜誌] 6(97), 2009, p.10-29, 2010.
- [4] フェに所蔵されていた古典籍は、ベトナム戦争時の攻防戦（1968）で一部が失われた可能性もあるという。またフェでは阮朝大臣・張登桂の孫である老婦人の屋敷に醫藥書籍を保管する書屋があるといい、阮朝太醫院の書籍が傳わる可能性もある。
- [5] 朱文安は名を朱安という。ハノイ郊外の出身で、1292年8月25日生れ、1370年11月28日に78歳で亡くなった。彼は科擧に合格後も仕官せず、故郷で學校を開き多くの學生を指導したという。また陳明宗（1314～1329）王の皇太子のため、國子監の教師も一時任じた。彼は朱熹集注の概略を『四書說約』10卷に著し、ベトナム儒学の泰斗とされ、本書はベトナム現存最古の儒家經典關連書で、朱子學傳入の最古の證據でもある。
- [6] 慧靖は10～17世紀に幾人かの僧に引き繼がれた僧名で、その一人が15世紀初期の醫學に通じた洪義だという説もある。
- [7] 潘孚先の字は信臣、黙軒と號し、ハノイ郊外の慈廉縣東顎社の人。生没年不詳。陳順宗期の丙巳年（1396）の太學生科に及第、順天2年（1429）の明經科に再度及第。官職は國史院同修國史、ついで天長安撫使、後に國子監博士にいたる。彼は陳仁宗（在位1225～1258）から陳重光（在位1409～1413）までの史書『大越史記續編』や、陳朝期から黎朝期までの119人の詩文624編を含むベトナム最初の文學選集『越音詩集』6卷を編纂した。
- [8] 阮直の字は公挺、訐寥と號し、河西（現ハノイ市西部）青威縣貝溪社の人。18歳で郷貢に合格、大宝3年（1442）に狀元に合格した。黎仁宗時代（1443～1459）の太和年

間（1443～1453）に翰林院侍講を任じた。他の著作に『訐寥集』『愚閑集』がある。

[9] 阮嘉璠はまたの名を阮世歴、養庵あるいは慈安と號し、景興 10 年（1749）に慈廉縣（現ハノイ）安壟村で生まれた。26 歳の景興 36 年、科擧で進士に合格し、山西道監察御史事に補された。

[10] 現存書には胎前調經方法・胎前調養方法・胎産調理方法・胎産調養方法の書名も與えられているが、いずれも本書中の篇名に由來する誤認。正確な書名は『胎産調經方法』である。

＊本報告は日本学術振興会科学研究費平成 21 年度基盤研究(B)（海外学術調査）「中国古医籍が日・韓・越の伝統医学形成史に与えた影響の書誌学的研究」の一環である。



眞柳誠

1950 年生。東京理科大学薬学部卒業。北京中醫學院留學の後、昭和大學醫學部にて醫學博士。北里研究所附屬東洋醫學總合研究所勤務を経て現在、茨城大學大学院人文科学研究科教授。日本醫史學會理事・中國出土資料學會理事・東亞醫學協會理事。編譯書『和刻漢籍醫書集成』

『小品方・黃帝內經明堂古鈔本殘卷』『日本版 中國本草圖錄』『善本翻刻 傷寒論・金匱要略』、研究論文・調査報告 222 篇など。